

2025 年度 9 月入学 修士課程 一般入学試験・国費留学生等入学試験・学内選抜入学
試験（第 2 回）・海外指定大学推薦入学試験

2026 年度 4 月入学 修士課程 学内選抜入学試験（第 1 回）

課題文を読んで、2500 字から 3000 字程度で設問に答えなさい。その際、資料や文献を参照し、それらを明記すること。参考文献や引用文献等のリストも上記文字数に含まれます。

設問

課題文は、コンテキストの「違い」と「ずれ」を分けて述べています。それぞれどのような意味か、簡潔にまとめなさい。その上で、コンテキストの「ずれ」の具体例を自分の経験に基づいて述べ、その「ずれ」が起きた理由について説明しなさい。

課題文

俳優は、台本を渡されると、多かれ少なかれ、その演じるべき対象の人柄を想像しながら演技を行う。これを通常、「役作り」と呼ぶ。上品な人なのか下品な人なのか、怒っているのか悲しんでいるのか、集中しているのか心ここにあらずか……。何らかの想像をしながら、俳優は発語をする。

いま問題になっているのは、「旅行ですか?」という台詞である。この台詞自体は、英語に翻訳しようが韓国語に翻訳しようが、誤訳のしようもない簡単な言葉だ。俳優の想像力を駆使するまでもない台詞のように思われる。

しかし、この「話しかける人」が、どこの国の人なのか、あるいはこの台詞、この台本を書いた人間がそもそも、どこの国の出身なのかによって、この「旅行ですか?」という言葉の意味はいは大きく違ってくる。

話しかける人がアイルランド人なら、これはまったく普通の行為だ。先般、フィリピンから来た留学生に聞いたところでは、列車の中で長時間乗りあわせているのに話しかけなかったら、そちらの方が失礼だという答えが返ってきた。

一方、日本人は一割しか話しかけない。だから、もしある俳優が、この「旅行ですか?」という台詞を言おうとすれば、ちょっと積極的な人、あるいは少し図々しいくらいの人といった心構えで役作りをしないと不自然になってしまう。

さらに、これがイギリスの上流階級の男性という設定ならば、この台詞は、まったく別の意味あいを帯びてくる。この階級は、人から紹介されない限り他人と話してはいけないというマナーがあるので、通常は話しかけない。だからもしこの階級の人間が自ら「旅行ですか?」と言ったとすれば、考えられるのは、たとえば以下のような事柄だ。

・ この人は、何らかの事情で、正当な教育を受けていない。

・ 貴族の階級を捨てて、放浪の旅に出ている（その証しとして、下層階級の者がよくやるように話しかけてみた）。

・ マナーを破ってまで話しかけなければならないほど、相手に関心を抱いている。

おそらく作家は、「旅行ですか？」という台詞に、このような何らかの意図を込めている。そうでなければ、イギリスの上流階級の男性が、この状況で話しかけるのは不自然だということになってしまふ。

このように文化的な背景が違えば、なんの変哲もない一つの台詞でも、異なる意味や意図を持つ。

話し言葉の個性

それぞれの俳優は、すでに二〇年、三〇年と生きてきて、俳優である以前に一個人としての「話し言葉の個性」ともいうべきものを持っている。一つの言葉から受けるイメージもまちまちだし、列車の中で話しかけるかどうかといった言語行動も、一人ひとりに癖のようなものがある。

たとえば私たちの肌の色が、白人、黒人、黄色人種といった大きなカテゴリーと、同じ日本で生まれ育つても色の白い人もいれば、少し濃い人もいるといった個体差があるのと同様に、話し言葉の個性にも、国民性や民族性と、その中の個人差がそれぞれ存在する。日本人は、列車の中ではあまり話しかけないが、中には話しかけるといふ人も一定数いる。

これが、アイルランド人は絶対に話しかける、日本人は絶対に話しかけないというように、あらかじめ決まっているなら話は楽なのだが、そうはいかないところに演劇の難しさも、異文化間コミュニケーションの難しさもある。私は実際、人生に一人だけけど、シャイなアイルランド人というのに会ったことがある。

同じ日本語を話していても、私たちは一人ひとり、違う言葉を話している。

こういった話し言葉の個性の総称を、「コンテキスト」と呼ぶ。コンテキスト＝contextは、本来は文脈という意味だが、ここではもう少し広い意味で、「その人がどんなつもりでその言葉を使っているか」の全体像だとも思ってもらいたい。

俳優には俳優のコンテキストがある。劇作家にも劇作家のコンテキストがある。これがびつたりと重なれば苦勞はないのだが、そうはいかない。

たとえば劇作家の私が、ト書きに「砂漠」と書いたとしても、砂だらけの砂漠をイメージする人もいれば、岩がごつごつした砂漠を思い浮かべる人もいれば、「砂漠なら当然サボテンが生えて

いるだろう」と考える人もいる。

だが、同じ舞台に関わる人間の持つイメージがこんなにもバラバラでは、観客には何も伝わらない。実際、舞台の片隅では砂に足を取られる演技をしている俳優がいて、もう片方では、岩をよじ登る俳優がいたのでは、どんな砂漠かは少しも観客に伝わらない。だから私たちは、まず作りの手でイメージを共有する必要があるし、演出家の主な仕事も、この点にあると言っているつもりだろうか。だが、ことは、そう簡単にはいかない。私たちは、同じ日本語を話しているつもりでも、それぞれ違う言葉を話しているのだから。

ここまで、私が執拗に問題にしてきたのは、「旅行ですか？」という簡単な台詞だった。この台詞は、哲学的な意味があるわけでもない。シェイクスピアの長い台詞でもない。しかし、これを高校生などが演じようとするとうまく言えない。だがうまく言えなくて当然なのだ。高校生に尋ねれば、九割五分の生徒は、普段、自分からは他人に話しかけないという方に手を挙げる。

ということは、簡単に見えるけれど、「旅行ですか？」という台詞は、その子のコンテキストの外側にある言葉だということだ。あるいは、もっと一般的に言えば、簡単な言葉だけれども、普段は使っていない言葉だということになる。

この「簡単に見えるけれどコンテキストの外側にある言葉」のことを、私はコンテキストの「ずれ」と呼んでいる。そして、まったく文化的な背景が異なるコンテキストの「違い」より、その差異が見えにくいコンテキストの「ずれ」の方が、コミュニケーション不全の原因になりやすい。私たちは、この「ずれ」を容易に見つけることができないから。

平田オリザ（二〇一二）『わかりあえないことから——コミュニケーション能力とは何か——』講談社現代新書（二五八—一六三頁）